

大信心はすなわちこれ、
長生不死の神方(「教行信証」信巻)

地域真宗史ファイルドワーク報告 富山県西部における聖徳太子信仰

はじめに

二〇二一年(令和三年)に聖徳太子一四〇〇回忌を控え、真宗の僧侶・門徒にも深く浸透してきた歴史のある聖徳太子信仰を、改めて問い直す必要があるのではないだろうか。

聖徳太子信仰は、東北、関東、三河、近畿など、各地にそれぞれの地域の特徴を持ちながら展開している。その盛んな地域の一つとして富山県西部が挙げられる。

同地域には、毎年七月二十一日から二十九日まで太子伝会を営む井波別院瑞泉寺(南砺市井波)と、同時期に勤める虫干法会(中世の聖徳太子絵伝などを開帳する城端別院善徳寺(南砺市城端))がある。

また井波瑞泉寺から北西部の近隣地域には、近代に聖徳太子二歳の姿をかたどった南無仏太子像が集落ごとに安置されている。このような聖徳太子信仰の実態に迫ろうと、二〇一九年七月二十二日から二十四日に鶴見晃所員・御手洗隆明研究員・藤原智助手ならびに筆者は、富山県西部においてファイルドワークを行った。地域民衆の信仰を集めた別院とその周辺地域の歴史を、聖徳太子信仰の観点からとらえ直すことを課題にした。

一、野にある南無仏太子像

砺波地域を中心とする富山県西部には、上

半身裸で腰に緋の袴をはいた聖徳太子二歳の姿である南無仏太子像が二百七十体以上確認されている。調査研究を精力的に行われてきた尾田武雄氏(日本石仏協会理事、砺波市文化財保護審議委員会会長)は、その成果を『とやまの石仏たち』(桂書房、二〇〇八年)などにまとめている。七月二十二日、尾田氏の案内で、南無仏太子像を安置した集落七カ所を訪れ、そのうち同日に執行された祭りを二カ所で調査することができた。

南無仏太子像が分布するのは、井波瑞泉寺から北西二十キロメートル圏内の、散居村が展開する地域(砺波市北西部、小矢部市南東部)である。

一八七九(明治十二年)九月一日、香部屋からの出火によって、瑞泉寺は全焼してしま

う。その再建へ向けての費用を勸募するため、南無仏太子像や絵伝を各地に巡回させて、開扉や絵解きがなされた。これらが巡回された地域で、明治二十年代頃から南無仏太子像を安置する集落が増加していった。それは一九一八(大正七年)年に瑞泉寺太子堂が建立されるまでの約三十年間に集中している。瑞泉寺の危機的状況のなか、同寺の太子にまつわる法宝物が巡回してきた地域で、瑞泉寺の南無仏太子像の写しを在在する集落へ迎えようという気運が広まったとみられる。

まず訪れたのは、①砺波市林(新屋敷地区)

りでは、明覚寺の住職が勤行をして太子像の由来などを語られた。

翌七月二十三日の『富山新聞』に今回の調査についての記事が掲載され、それをきっかけに、氷見市床鍋の山崎哲夫氏が郷土史の定期刊行物である『氷見春秋』第八十号(氷見春秋会、二〇一九年)に「太子様と名工源助」を寄稿されている。南無仏太子像をめぐる歴史を再評価する契機となったならば幸いである。

さらに③

砺波市五郎丸の太子堂

④砺波市太郎丸鍋島

の地藏堂、

⑤砺波市太田三区の太子堂

【写真1】

③砺波市五郎丸の太子堂

の太子堂である。一八九五(明治二十八年)年に有志が勧進して創建されている。その後、再建や移転を経て、一九七二(昭和四十七)年に、お宮(神明社)や公民館と隣接した現在地へ現存の太子堂が建立された。今回、午後三時からの祭りに立ち会うことができた。例年、大念寺(浄土宗、小矢部市)の住職によって読経がなされる。お堂の脇には一九二五(大正十四)年十月に寄進された職が掲げられ、厨子に安置された石仏の南無仏太子像の前には山海の珍珠(酒、米、かまぼこ、寒天、たまねぎ)と赤飯が供えられた。

次に向かったのは②砺波市木下の太子堂である。確認されている南無仏太子像には四十〜五十七センチ程の石仏が多いなか、木下地区の南無仏太子像は、最も大きい九十五センチもの木像である。太子堂や太子像が修復された一九九五(平成七)年春、「お太子様鎮座由来」がまとめられ、太子堂の側面に掲げられている。その内容は次の通りである。

明治時代になってからの木下では、火災・疫病・落雷などの災難が続き、地区民は貧困にあえいでいた。そうしたところ、木下に住む半十郎(高利貸し)の息子が、近隣の明覚寺(浄土真宗本願寺派、高岡市戸出六十歩)で修行後、氷見市床鍋にある光楽寺(浄土真宗本願寺派)の住職となった。ある時、光楽寺住職の夢枕に二歳の姿の太子が現れて、「山

中の谷底で埋もれているので、どうか掘り出してくれまいか」と告げた。探したところ、山崩れした谷底に横倒れになった太子像が、土中から光明を放って出現した。その太子像を光楽寺に安置したところ、再び夢で「火災難苦を救いたいのぞ、木下へむかえてくれ」と告げられた。そこで一八九九(明治三十二年)、木下の若衆がその太子像を、光楽寺から木下まで十二〜十三里(五十キロメートル程)の道のりを交替で背中に担いで運んだという。

また次のような別伝もある。床鍋地区に住む大工の棟梁である源助は、宮大工として働く一方、冬季は獅子頭の面や神像の彫刻もした。太子像も彫ったが、廃仏毀釈のため、焼却することになってしまった。そこで源助は、家の近くの小臼が峰に埋めた。

時代が変わり、砺波地域から入寺した光楽寺住職が、広いところへ連れて行って欲しいという夢のお告げを太子から受けた。そこで早速、小臼が峰から太子像を掘り出し、生家のある木下へ連れて行って大切に奉養したという。

廃仏毀釈のさなか太子像を守り伝えた語り次いでいる点は興味深い。遠く氷見市床鍋と縁があるとみられる太子像が現代まで、木下地区の人々によって大切に守り伝えられてきた。二十二日の午後六時から行われた祭

【写真2】

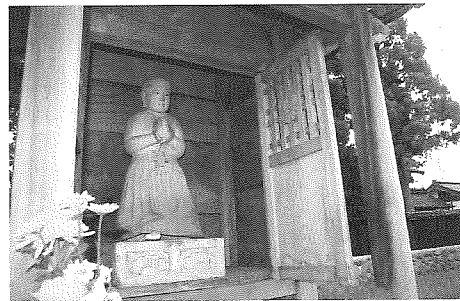
⑤砺波市太田三区の太子堂

【写真1】

③砺波市五郎丸の太子堂



【写真2】 ⑤砺波市太田三区の太子堂



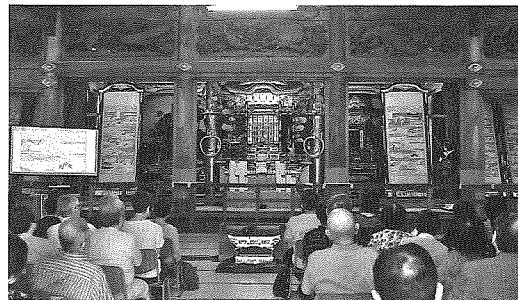
【写真1】 ③砺波市五郎丸の太子堂

区の太子堂、⑦砺波市野武士の太子堂を案内していただいた。いずれも、道路の脇や辻にあり、尾田氏は「野にある南無太子石仏」の典型例として紹介された。目印のあまりない散居村において、道しるべとしての役割も担ったという。南無仏太子像が、生活に身近な信仰対象として存在したことが実感された。

二、井波瑞泉寺の太子伝会

翌二十三日は、井波瑞泉寺の太子伝会に参拝した。瑞泉寺では、開基である本願寺第五代の禪上人(一三五〇〜九三三)が、後小松天皇から聖徳太子絵伝と南無仏太子像をいただいたと伝えている。この太子伝会は、瑞泉寺十二代住職である応現院真照(一六九五〜一七四四)が絵解きしたことに始まると言われ、太子信仰を基盤とする瑞泉寺を象徴する行事として受け継がれてきた。

まず太子堂にて、八幅の聖徳太子絵伝の絵解きを拝聴した。瑞泉寺近隣寺院の僧侶らが交代で絵解きを担当している。前生譚から没する五十歳までの生涯が、期間中に順次語られる。一歳分を半座(約三十分)で絵解きする。その構成は五段説教(讃題・法説・譬喩・因縁・結勸)の体裁である。八幅のうち、絵解きをする絵伝は、常に宮殿の近くに設置され、宮殿前の外陣に立って語られる。さらに十年程前からは、参詣席前方にモニターを設



【写真3】竹部俊恵氏による絵解き

とで、絵伝の一場面を解いたことが確かめられる【写真3】。

半座の絵解きが二度なされた後、南無仏太子像の縁起が拝読され、厨子に納められた南無仏太子像が開帳される。参詣者は自然と合掌して念仏しておられた。以前には、参詣者が外まであふれて、うなるような念仏の声があがったという。

その後、賽銭や万人講を募る。万人講とは、参詣者が帳簿を持った僧侶または門徒略肩衣と朱色の肩衣を着した賽銭方に、肉親の命日(月・日)を伝えて一口五百円を納め、読経されるものである。万人講経(阿弥陀経、短念仏、回向)は、一日の絵解き終了後に勤められる。一人で何口も納める参詣者の熱心な

置し、絵解きされる絵伝部分を映し出し、念仏の教えを伝える法話としての色彩が強い印象を持つ。終盤になり、山鳥の羽で該当部分の絵伝が指し示される。姿があらちちらでみられた。昼食には、鯖ずしをメインとするお斎をいただいた。この鯖ずしは、塩鯖を米麴や日本酒などで漬けて込んで発酵させた「なれずし」である(井波別院瑞泉寺の鯖ずし)(あの寺の味お斎のたび)『月刊同題』二〇一九年七月号)。独特の風味で、長年、太子伝会の名物として親しまれている。なお城端善徳寺の虫干法会でもお斎に鯖ずしが提供され、両別院での味わいの違いも、楽しみとされているところである。また期間中、虎之間での特別宝物展や山門の楼上を観覧することもできる。

三十五年という長きにわたって聖徳太子絵伝の絵解きを実践されてきた妙蓮寺(高岡教区第四組、南砺市藤橋)住職の竹部俊恵氏によれば、井波四箇寺(現在は三箇寺)や瑞泉寺列座役によって絵解きが継承され、台本は四箇寺で個別に相伝されてきたが、現在は台本を共有して伝授し、後継者の育成も進められているという。竹部氏は、この絵解きの歴史と妙蓮寺に伝承されてきた台本について、以前に紹介している(竹部俊恵「井波別院瑞泉寺太子伝絵解きについて」『文藝論叢』第七〇号、大谷大学文藝學會、二〇〇八年)。

三、虫干法会での聖徳太子絵伝開帳

最終日の二十四日は、城端善徳寺の虫干法会へ参拝した。瑞泉寺の太子伝会と同時期で、龍谷大学生によってなされた。この絵伝は以前、南無仏太子像の背後に掛けられていたが、絵解きはされていなかった。阿部泰郎氏(龍谷大学教授)を中心とする名古屋大学大学院による調査の過程で四天王寺系の影響を受けたものと再評価され、二〇〇七(平成十九)年から大学院生らによってその絵解きが実践されたことに始まる。研究調査者ともに行う新たな取り組みが虫干法会でみられた(阿部泰郎監修、蔡佩青編『城端別院善徳寺虫干法会』二〇一四年)。

竹部氏によれば、他宗の寺院で行われる絵解きの場合、絵の説明に特化している印象を持つが、瑞泉寺では、巧みな話術を用いるというより、聖徳太子の一生を絵伝に基づいて語りながら、真宗の教えをお取次することに力点を置いているという。

瑞泉寺太子堂に安置され、近代に近隣集落へも流布した南無仏太子像は、太子が二歳で東方に向かって「南無仏」と三回唱えた姿である。つまり我が国で最初に合掌された姿であり、私たちに先立って念仏してくださったお姿として、民衆の信仰を集めたのではないかと、竹部氏は語られた。そして真宗において太子信仰が重視されてきたのは、六角堂での夢告が象徴するように、親鸞聖人を導いた存在であるからという。

「仏法弘通の浩なる恩を謝せんがため」(『御伝鈔』聖典七二六頁)、聖徳太子を崇め続けた親鸞聖人の姿勢を追い求めてきたことが、真宗における聖徳太子信仰の背景にあると再認識できた。

(教学研究所助手・松金直美)

amrta



【写真4】万人講を募る(城端善徳寺)

ある七月二十二日から二十八日まで執行される法要である。この虫干法会は、一八九六(明治二十九)年に始まったと伝わっている。江戸時代から行われてきた井波太子伝会の期間中、瑞泉寺だけでは宿泊する参詣者を収容しきれなくなつたため、善徳寺にも宿泊するようになった。そうした人々へ、法宝物を公開したのが始まりと言われている。

午前九時半から、本堂にて勤行と法話があり、続いて城端善徳寺の開基でもある蓮如上人の絵伝の絵解きがされた。その後、万人講が募られる【写真4】。善徳寺では、春秋彼岸会・蓮如上人御忌法要・虫干法会で、万人講に対する読経がなされる。その後、新講堂・対面所へと場所を移して、「親鸞聖人六角堂

お通いの御木像」をはじめとする法宝物の開帳が順次行われた。新講堂での開帳が終わった後、室町時代末期から桃山時代のものとみられる四幅の聖徳太子絵伝の絵解き

以上のように、太子伝会・虫干法会の時期にあわせて、富山県西部において聖徳太子信仰を伝える場を巡った。

⑦砺波市野武士の太子像は石工によってつくられた石仏で、宮大工によって設計されたお堂には精巧な彫刻が施されており、瓦屋根もまた専門の職人が担った。職人の信仰としても知られている太子への信仰を具現化したものと言えよう。

尾田氏によれば、南無仏太子像を集落に安置した主導層は若連中(若い衆)であったという。この地域では若衆報恩講(ワカシユウボンコ)も盛んであり、そのような真宗門徒の若者層が、草相撲や獅子舞にも熱心であるなかで、太子信仰も大切にしていた。砺波地